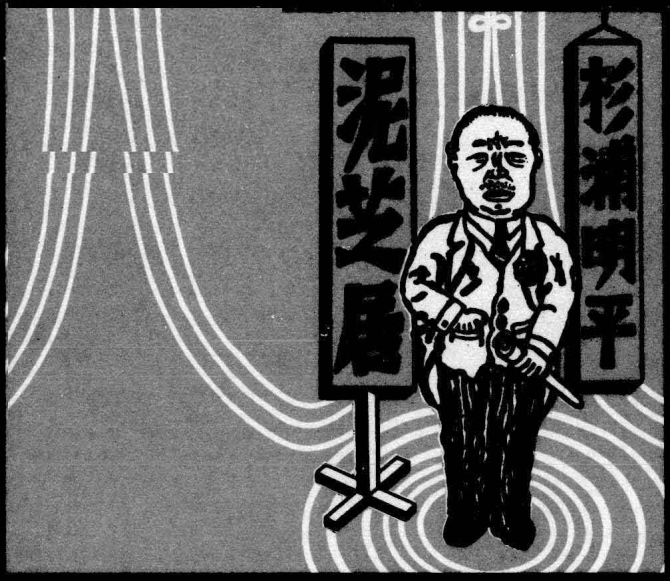
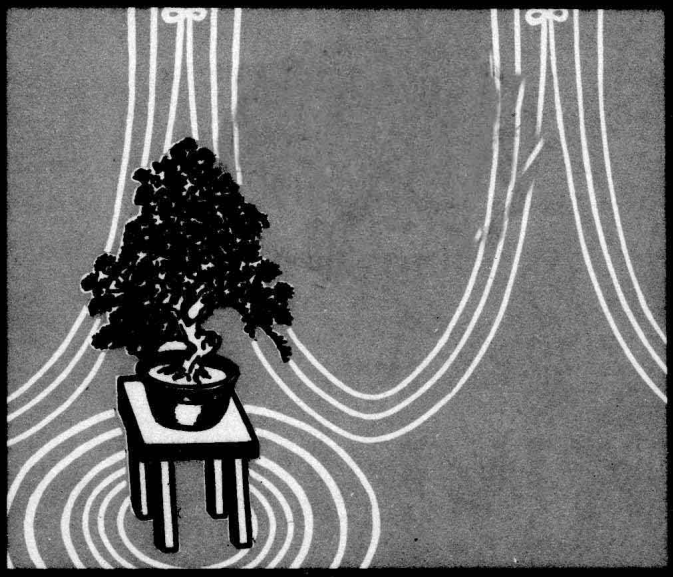
杉浦明平
泥芝居





版画

杉浦明平（すぎうら　みんぺい）
一九一三年、愛知県に生まれる。東大国文科卒。敗戦後、渥美半島に住み、五五年より八年間町会議員をつづけ、その間の体験を痛烈な風刺精神でつづった「ノリソダ騒動記」は記録文学の傑作である。また「小説渡辺崋山」で毎日出版文化賞を受賞、小説、評論にと多彩な活躍をつづけている。著書に「ルネサンス文学の研究」「秘事法門」「戦国乱世の文学」「失踪記」「ボラの哄笑」などがある。

泥芝居

一九八四年　四月一〇日　第一刷印刷
一九八四年　四月一五日　第一刷発行
定価一二〇〇円

著者　杉浦明平
発行者　福武哲彦
発行所　株式会社　福武書店
東京都千代田区九段南二―三―二八
〒一〇二　電話（〇三）二三〇―二一三一
振替口座（東京）六―一〇五〇九七

本文印刷　図書印刷
平版印刷　栗田印刷
製本所　小泉製本

（落・乱丁本はお取替え致します）

© M. Sugiura 1984
ISBN4-8288-2117-1 C0093
NDC913 194 214p

泥芝居　目次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

泥芝居　7
幕間劇　45
闘士の休日　68
詐欺と契約違反の境　87
次郎さ海へ乗り出す　108
最初のつまずき　145
最後の計算ちがい　175
　されど次郎さは死なず

装画・装丁　田村義也

泥芝居

泥芝居

一

次郎さを見かけたのは、何十年ぶりのことだろうか、数えてみてもはっきりしなかった。小学校のとき、わたしの方がたしか二三年上級だったが、何かのはずみにからかったら、次郎坊はずんぐりした体ごとその凸凹頭をもってわたしに突進してきた。小学生のころだから二三年の差は大きく、弱虫のわたしでも、次郎坊の頭突きを軽く受けとめてころがすくらいのことはむずかしくなかった。それなのに、次郎坊は、ころがされても泣きもせずに、起き上がるやまた頭突きで突進してくる。三四回ころがせば、どんな子供でも泣きだすか、抵抗しなくなるかにきまっていたのに、起き上がるごとにますます目を血走らせて、突進をくりかえすのだった。わたしの方がうんざりして、どう始末してよいのか分からなくなってためらったとたん、

わたしは右の手首をがぶりと噛みつかれたのを感じた。鋭い牙のような歯だった。「あ、いてて、いてて」と思わず叫んだ。が、次郎坊は、そのままかじりついて放そうとしない。本能的に、耳をひっつかんで引き放そうとしたけれど、びくともしないどころか、牙をもっと深く肉の奥に突っこんでくる。相手が年上か同級生だったら、わたしはできるだけの大声で泣き出しただろうが、二三年も年下の相手で泣くわけにもゆかぬから、泣きたいのをこらえながら、「次郎坊、あやまった、やめとくれ、やめとくれ」と頼む以外にはなかった。

それは文弱なわたしの少年時代でも特にはずかしい失敗の一つだったけれど、時がたつにつれてその印象は薄れていって、じつはそのデテールや会話も、はっきりしなくなってしまったが、しかし我慢づよく何回も起き上がって向ってくるその執拗さをもてあましたうえ不意をついて、手首に噛みつく敏捷さをも持っているのに後々まで何となく空怖しさをおぼえたものである。

次郎坊とよく一しょに同じムラの方へ帰ってゆく正三の方は、鹿のように細く敏捷でいたずらをしても逃げ足が早く、しかもたまにうまくつかまえてゴツンとやると、その二三日後、並木の松の蔭に待伏せしていて、礫を投げつけて一目散に逃げ去って摑まえようもなかった。ずんぐりして、いたずらをしても逃げようとしない次郎坊とはまるで対照的だった。同じムラに

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

帰るのだから、いつも一しょにいるのだろうと思っていたら、たれからか、次郎と正三とは従兄弟どうしだで、あんなに仲がええのだぞんと教えられたが、姓はちがうし、どう見ても血の続きがありそうには思えなかった。「信じられんなあ」とわたしがいうと、たいていのひとが「とても従兄弟とは信じられんのん」というのであった。

それから長い戦争期間を挟んで、わたしも生まれ故郷にもどって住みつくことになった。年齢もちがい、職業もちがい、お互いの住んでいるムラもすこし離れているので、次郎さのことをほとんど耳にしたことがなかった。ただ、次郎さの父の太郎さは、町に出るとき、じつにしばしば見かけた。むかしのトラホームが治らぬままなのか、いつも目やにを流して、ぼろにくるまれた小さな体でせっせと自転車を漕いでいた。株や不動産のブローカーで、すこしでも儲けがありそうな話を耳にすればすぐ自転車でかけつけて（もちろん、そのころは車などなく、牛車と自転車の時代だった）かなりあこぎな商売をして、田地や株をずいぶん握っているというわさだった。わたしは、次郎さとは小学生のころの顔見知りだから、親の太郎さとすれちがうとき、「やあ」と挨拶したけれど、太郎さは何かの目的を見すえているみたいにふり向きもしないで、自転車のハンドルにつかまったまま、ひたすらペダルを踏んでゆく。だから、わたしも太郎さに出会っても挨拶しないことにした。ただ一度だけ、夕暮れ近く電灯のともりは

じめた町の中を、背広を着て靴をはいた老人が自転車を漕いでゆくのを見て、見馴れぬじいさんだなと注意して見たら、薄い髪をきちっと油で頭にはりつけた太郎さだった。親戚のお通夜にでも出かけるのだろうか。それはともかく、左右を顧みず、一心に前方を見つめたまま走っている恰好は、やっぱし太郎爺さだった。

太郎爺さがいつごろなくなったか、わたしは知らぬ。が、たぶん太郎爺さがなくなったころ、跡を取った次郎さの名前がときおり人の口の端にのるようになった。

二

ついでにいえば、次郎さの従兄弟の正さの噂はわたしの耳に入ることがめずらしくなかった。戦争中は要領よく憲兵を志願して、砲兵工廠詰めの曹長で、長剣を帯びて、工場の中を監視して歩いていた。曹長は下士官中の最高位にあたるから、正さが工廠内を巡視するさい、出会った工員や徴用工は、停止して不動の姿勢をとり最敬礼しなければならなかった。うっかり、そうしないで通りすぎたり、敬礼の仕方がわるかったら、木村正三憲兵曹長は「こらっ！とまれ！　気をつけえ！　上官を何と心得る。この馬鹿もの」とすざまじいピンタで報いられるという評判だった。正さと同じムラから出ていた徴用工のKさんが、たまたま木村憲兵曹長

に出会った。Kさんは、正さより年長、青年団でも先輩で、家も正さよりよかった。「やあ、正さ」とKさんが親しそうに近よると、正さは、「気をつけ！」と大声でどなりつけた。あっけにとられているKさんにもう一度「気をつけ！」とサーベルを鳴らしながら、どなりつけた。Kさんも思わず気をつけの姿勢をとった。すると「上官に向って正さとは何ごとだ。この馬鹿もん。今後気をつけろ」と叱りつけた。さすがにピンタは取らなかったそうだが、田舎では「あの胡麻正がサーベルを提げたえらい憲兵になったげなぞう」と評判になった。

そして敗戦のどさくさまぎれにポツダム進級で、正さは曹長から二三階級躍進、憲兵少尉か中尉に出世したらしいが、それがかえって仇となって、公職追放、田舎に引揚げざるをえなかったのだが、元憲兵将校だったことを一言も漏らさなかったところから判断して、パージは正さにとってかなりの痛手だったのかもしれない。田舎にもどっても、跡取りでなかった正さは、兄のお情で、家を建てるだけの三十坪ほどの土地をゆずってもらっただけ。漁に出たり、野菜や肥料やらのブローカーしたりして過ごさねばならなかったようだ。どのようにしてパージ後の元憲兵将校が生きついだか知らないけれど、わたしの耳に最初に入ったかぎりでは、アンゴラ兎の話が胡麻正さと関係していた。特攻帰りの茂さが五十羽もアンゴラ兎を飼っている。毛皮として高く売れるし、それでなくても大学の医学部の実験用で引っ張り凧だげな。そ

の世話をしたのは胡麻正さだというだけで、茂さのやつ、ほんとに儲けるかな、と疑うものが少なくなかった。茂さはわたしより十数年年下だったが、腕白小僧だったからよく知っていた。特攻偵察機でアメリカのグラマン機の攻撃をうけて三回ほど撃墜されたが、三回とも救助されて終戦を迎えると、落下傘のすばらしい絹地や航空用高級時計を大量に持って引揚げてきて、それを売り飛ばしながら数カ年にわたって自棄酒を飲んでは、芋畑で酔い倒れていた。が、もともと三町歩をもつ大百姓の息子だったから、胡麻正さのいうままに、一儲けするつもりで、アンゴラ兎の二十羽（話では五十羽といわれていた）ばかり買いこんだ。そのころ農家の母屋の床下には、広くて深い穴が掘られ、冬の間籾糠の底にさつま芋がぎっちり囲われていた。が、茂さはその穴を利用して、二十羽のアンゴラ兎を飼うことにした。しかし飼育してみると、儲かる儲からぬを計算するよりさきに、家族十数人がノイローゼになってしまった。というのは、二十羽のアンゴラ兎は、夜も昼もキイキイ軋るような悲鳴を挙げて休む暇がなかったため、一家たれひとり眠ることができなかったのである。「特攻隊あがりの茂さは要領よく落下傘や高級時計を担いできたが、胡麻正さにゃかかって見事にやられたのう」と胡麻正さの名前が人々の口の端に上がったのであった。

それにつづいて、みみずの日干しを正さが買いつけておる、何でも大阪の武田何兵衛とやら

いう日本一の薬屋が解熱剤にまぜるためにいくらでも買ってくれるだげな、と、大人から子供まで、藪の中を掻きまわしてみみず取りに熱中していた。夏になると、蟬の抜け殻を正さが買ってくれると、わたしの家の庭の桜の木に朝早くよじ登って蟬の殻をさがしている小学生を見かけたことも二度や三度ではなかった。正さが蛇ならどんな蛇でも買ってくれるげなという話も耳に入ってきた。

そのうち、クコブームがきた。クコという灌木の葉も根も実も不老長寿の妙薬、ありとあらゆる病気に効く万能薬として喧伝されて、日本じゅうがクコを求める声にあふれたことがある。わたしの畑の土手に生えていたクコの木は次から次へと盗掘された。もともとクコという灌木は、川のほとりなどにいくらでもひとり生えしていたし、今もしている。が、そのクコの木がほとんどみんな盗み掘られてしまった。クコの木は、きわめて強く、わずかの根の切れ端が残っておれば、そこから新しい芽を吹きだすものだから、盗掘されても、二三ヵ月すれば、根がちぎれちぎれにされただけ数多くふえるし、枝がしだれて土につけば、そこに根を張って新しい株になる。おそるべき繁殖力をもった灌木である。

わたしの知人で二町歩の農地をもっているAさんがある夕方、居酒屋で焼酎を一ぱいきこし召してからやってきて、「おい、先生、おれも今度は一儲けせるぞね。クコを三反歩植えたで

のん。一反歩で毎年三十万や四十万になる。来年は根分けして五反歩くらいに増やしたい。そのときにゃ、先生にも奢るで、待っとりな」と勇ましかった。

「クコの木を三反歩？　そんなにたくさんの苗をどこで手に入れたんだい」とわたしもあきれていった。

「正三から手に入れただ。正三のやつ、注文が殺到していて、とても一本の余分もないけど、おしとは十八連隊以来特別の仲だで、他の人の予約分を減らして、都合せるだなあ。今日本じゅうどこへいってもクコの苗をほしい人ばかりで、五本や十本ならともかく、千本二千本などという大量のクコの苗は、何千枚の百円札を並べても、手に入れようがねえだぜ。といって、惜しみ惜しみゆずってくれた。持つべきものは戦友だなあと思ったぞね」

と、Aさんは、すでに何十万円を手に入れたようにうれしさのあまり涎を垂らしながら、打明けたものである。

「ああ、あの胡麻正さから買ったのかい」とわたしは思わず声をあげたが、Aさんは、自信ありげに、

「まあ、見てな。クコぐらい、すごく効く薬はないだでのん。ガンでも結核でもクコをのめばすぐ治る。そのうえ、葉も実も全部正三が買い取ってくれることになっとるで、売先のことを

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com